

8世紀半ばに創設され、後に王国修道院となった **Lorsch** 修道院は、ライン川中流域を中心に広く所領を展開させていた。その展開過程および所領構造は、12世紀に編纂された **Codex laureshamensis** によって窺い知ることができる。修道院の所領展開は、もっぱら経済上の目的のためであったのか、という問題意識の下で、ロルシュ修道院の所領の展開について、経済活動の実際、さらにその背景にある国王の政策、そして周辺地域との関わりという側面から検討してきた。

まず、ロルシュ修道院の所領獲得は、草創期は必ずしも国王のイニシアティブではなかった。ところが王国修道院となり、王権との結びつきが強くなったのをきっかけに、所領の展開が急速に始まる。修道院は、ライン川中流域の交通の要所を確保していったが、それはライン水系による流通へと必然的に結びつくものであった。その結果、生産者としての修道院、および流通拠点としての修道院所領という姿が見て取れ、そこに“商業ネットワーク”とも言うてもいいような様相が浮かび上がってくる。

しかし、こうした所領の形成や拡大の意図は、国王の政策との関わりから判断するならば、必ずしも経済的動機のみには帰するものではなかったと言える。それは一方では、修道院と国王の間の保護・奉仕関係を強化し、修道院に対する王権の至上権を確立するため、究極的にはライン中流域での支配権の確立を目指したものであったといえる。しかし修道院は、豊富な農業生産地を従えるがゆえに、生産者かつ流通担当者として修道院内外への物資供給において主導権を把握することができたのである。ここにおいて、支配権の確立を意図する国王側と、そこに直結した修道院側、双方にとって利益をもたらすことになるのである。

他方で、ロルシュ修道院所領は、“保護のネットワーク”という側面も有していたと言える。ロルシュ修道院は、創設者 **Rupertines** 一族のアイデンティティの象徴としての存在であった。そしてそれは所領の増大によって、**Rupertines** にとって、彼らの伝統の保持を継承する場となり、やがて王権による保護と宮廷とのつながりによって、同時にカロリング王朝の王権の伝統を保持し、王朝のアイデンティティを維持する存在ともなっていた。

在地貴族たちは、拡大するカロリング王権に不満を抱いていたことは事実であるが、**Rupertines** 一族のシンボルである修道院への保護は、彼らの敵意を緩和させる役割を果たしたであろう。こうしてロルシュ修道院所領は、王権—ロルシュ修道院—在地貴族を結ぶネットワークを形成し、修道院は王権と在地貴族の間の接点という存在であったと言えるのではないだろうか。